

「頼政」詞章（喜多流）

ワキ これは遠國方より出でたる僧にて候

我此程は都に候ひて

洛陽の寺社残り無く拝み廻りて候

又これより南都に参らばやと思ひ候

天雲の稲荷の社伏し拝み 稲荷の社伏し拝

み 猶行く末は深草や木幡の關を越え過ぎ

て 伏見の澤田見え渡る水の水上尋ね来て

宇治の里にも著きにけり宇治の里にも著き

にけり

急ぎ候ほどに これははや宇治の里に著き

て候 心静に一見せばやと思ひ候

げにや遠國にて聞き及びし宇治の里

山の姿川の流 遠の里橋の景色

見所多き名所かな

あはれ里人の来り候へかし

シテ なうなう御僧は何事を仰せ候ぞ

ワキ これは此處始めて一見の者にて候

名所舊跡残り無く御教え候へ

シテ 所には住み候へども 賤しき宇治の里人な

れば 名所とも舊跡とも いさ白波の宇治

の川に 舟と橋とは有りながら 渡りかね

たる世の中に 住むばかりなる名所舊跡

何とか答え申すべき

ワキ いやさやうには承り候へども 勤学院の雀

は蒙求を囀るといへり 所の人にてましま

せば御心にくうこそ候へ

まづ喜撰法師が住みける庵はいづくの程に

て候ぞ

シテ さればこそ大事のことをお尋ねあれ

喜撰法師が庵は 我が庵は都の巽鹿ぞ住む

世を宇治山と人はいふなり 人はいふなり

とこそ 主だにも申し候へ 尉は知らず候

ワキ 私は諸国を遊歴している僧

です。都の寺社仏閣を残ら

ず参拝したので、奈良に参

ろうと思います。稲荷のお

社に参拝して深草を過ぎ、

木幡の關を越えて伏見の澤

田を眺め、川に沿って行く

うちに宇治の里に着いた。

遠国でも噂に聞いた宇治の

里は、山の姿、川の流れ、

遠くの山里、宇治橋の様子

と見所の多い名所だ、誰か

里人が来ないだろうか。

シテ もしもし、御僧は何をおつ

しゃっているのですか。

ワキ 始めてここにきた者ですが

名所旧跡を教えてください

シテ この里に住む賤しい里人で

すから名所や旧跡も知ら

ず、宇治川の舟や橋があつ

ても私自身は世の中を渡り

かねている身の上。お答え

も出来ないのです。

ワキ いや、諺にもあるように、

その場所にいれば自然に覚

えるもの。まずは喜撰法師

の住んだ庵はどこですか。

シテ 難しいことを尋ねますね。

喜撰法師も、自分が世を憂

して宇治山に隠れたなどと

世間は噂を立てると言っ

ているほどですから、私はも

ちろん知りません。

ワキ 又あれに一村の里の見えて候は槇の島候か
シテ さん候槇の島とも申し

又宇治の川島とも申すなり

ワキ これに見えたる小島が崎は

シテ 名に橋の小島が崎

ワキ 向ひに見えたる寺は いかさま恵心の僧都

の 御法を説きし寺候な

シテ なうなう旅人あれ御覽ぜよ名にも似ず月こ

そ出づれ朝日山

地謡 月こそ出づれ朝日山 山吹の瀬に影見えて

雪さし下す島小舟 山も川も

朧々として是非を分かぬ景色かな

げにや名にしおふ

都に近き宇治の里聞きしに優る名所かな聞

きしに優る名所かな

シテ 此處に平等院と申す御寺の候をば御覽ぜら

れて候か

ワキ 不知案内の事にて候程に未だ見ず候御教へ

候へ

シテ こなたへ御入り候へ

なうなうこれこそ平等院にて候へ

又これなるは釣殿と申して面白き處にて候

よくよく御覽候へ

ワキ げにげに面白き處にて候

又これなる芝を見れば 扇のなりに取残さ

れて候は謂はれの候か

シテ さん候これは昔宮戦のありし時

源三位頼政合戦に打負け給ひ

扇を敷き自害し果て給ひし處なり

されば名将の古跡なればとて

扇のなりに取残し今も扇の芝と申し候

ワキ 痛はしやさしも文武に名を得し人なれども

跡は草露の道の辺りとなつて

行人征馬の行くへの如し あら痛はしや候

ワキ あれに見える村里は槇の島
ですか。

シテ そうです。槇の島とも、宇

治の川島ともいいます。

ワキ こちらの小さな島崎は。

シテ 有名な橋の小島が崎です。

ワキ 向いに見える寺は恵心僧都

が仏法を説いた寺ですね。

シテ 旅の人、ご覧なさい。名前

に不似合いな月が朝日山か

ら出ました。

地謡 そして山吹の瀬に月影がさ

して小舟は月の光で雪を乗

せているかよう。山も川

も優劣つけがたい眺めです

シテ 平等院はご覧になりました

か。

ワキ 不案内でまだ見ていません

シテ こちらにおいでなさい。こ

れが平等院です。これは釣

殿といって面白い建物で

す。よくご覧なさい。

ワキ いかにも面白い。またこの

芝生は扇の形に取り残して

あるのはどうしてですか。

シテ 昔、高倉宮の戦があり、宮

方の源三位頼政が負けて、

ここに扇を敷いて自害され

たのです。名将の旧跡とし

て今でも扇の芝と言ってい

るのです。

ワキ 気の毒に文武両道の有名人

が道端の露のように消えて

誰も気に留めないとは。

シテ げによく御弔ひ候ものかな

其の宮戦の月も日も今日に當りて候

ワキ 何と其の宮戦の月も日も今日に當りたると候や

シテ かやうに申せば我ながら

よそにはあらず旅人の 草の枕の露の世に
姿見えんと来りたり

現とな思ひ給ひそとよ

地謡 夢の浮世の中宿の 夢の浮世の中宿の

宇治の橋守年を経て

老の波も打渡す遠方人に物申す我頼政が幽
霊と名宣りも敢へず失せにけり名宣りも敢
へず失せにけり

シテ おお、よく御回向なさい

ました。不思議なことに宮
戦は月も日も今日なのです

ワキ 何と月も日も今日とは。

シテ 実は旅人の仮寝の夢に姿を

見せようと思つて来たので
す。これを現と思つてはい
けませんよ。

地謡 宇治は都から奈良へ行く中

宿で、この娑婆は衆生生死

の中宿のようなものです。

長い年月を宇治に過ごした

私は頼政の幽霊なのです

と、名宣るや消え失せてし
まいました。

(中人)

ワキ さては頼政の幽霊假に現れ給ひけるぞや

いざや御跡弔はんと

思ひ寄るべの波枕 思ひ寄るべの波枕

汀も近し此の庭の扇の芝を片敷きて夢の契

を待たうよ夢の契を待たうよ

シテ 血は涿鹿の河となり 紅波楯を流す

世を宇治川の網代の波

あら閻浮恋しや

伊勢武者は 皆緋緘の鎧着て

宇治の網代に 掛りぬるかな

うたかたの あはれ儚き世の中に

地謡 蝸牛の角の 争も

シテ 儚かりける心かな あらたつとの御事や

尚々御経讀み給へ

ワキ 不思議やな法體の身にて甲冑を帯し

御経讀めと承るは

いかさま聞きつる源三位の

其の幽霊にてましますか

(中人)

ワキ さては頼政の幽霊が仮に現

れたのか。さあ御回向をし
よう。水際に近いこの庭の

扇の芝の上で仮寝して、約

束通り夢で会うのを待とう

シテ 死傷した者の血で戦場は河

の様になり、血の波が楯を

流す。宇治川の網代にかか

る波。ああ娑婆が恋しい。

緋緘の鎧を着た伊勢武者が

宇治の網代に引つかかつて

いると嘲笑ったが思へば泡

沫のような世

地謡 蝸牛の角の争いのような

シテ 愚かなことであつた。実に

ありがたい。どうぞもつと

御経を讀んでください。

ワキ 入道姿に甲冑を着て御経を

読めとは不思議だ。源三位

の幽霊なのでしょうか。

シテ げにや紅は園生に植ゑても隠れ無し

名宣らぬ前に頼政と

御覽ずるこそ恥づかしけれ

唯々御経讀み給へ

ワキ 佛心安く思し召せ

五十展轉の功力だに

成佛正に疑ひ無し

ましてやこれは直道に

シテ 弔ひなせる法の力

ワキ 合ひに合ひたり所の名も

シテ 平等院の庭の面

ワキ 思ひ出でたり

シテ 佛在世に

地謡 佛の説きし法の場 佛の説きし法の場

ここぞ平等大會の

功力に頼政が

佛果を得んぞ有難き

シテ 今は何をか包むべき

これは源三位頼政

執心の波に浮き沈む

因果の有様現すなり

地謡 抑々治承の夏の頃

由無き御謀叛を勧め申し

名も高倉の宮の内

雲居のよそに有明の月の都を忍び出でて

シテ 憂き時しもに近江路や

地謡 三井寺指して落ち給ふ

さる程に平家は時を廻らさず

數萬騎の兵を關の東に遣はすと

聞くや音羽の山續く

山科の里近き木幡の關をよそに見て

ここぞ浮世の旅心宇治の川橋打渡り大和路

指して急ぎしに

シテ 紅花は草の中に植ゑてもす

ぐ知られる様に名乗る前に

頼政と分かられるのは恥づ

かしい。どうぞ御経をお読

みください。

ワキ 安心なさい。御経の功德に

よれば言い伝えて五十番目

の人も成仏できるのです。

まして今は直々にお経を伝

えるのですから。

シテ 功德の力によつて

ワキ 所の名も仏の教えに相應し

い。

シテ 平等院の庭の面

ワキ 思い出しました

シテ 釈迦存命の時代

地謡 寺の名の通り、仏の平等な

智慧の功德に浴す場で、頼

政が成仏できるのはありが

たいことです。

シテ 何を隠そう、自分は源三位

頼政、執心に浮沈している

のです。悪業の報いに苦し

む次第を話しましょう。

地謡 治承四年の夏、つまらない

謀反を起こし、その結果高

倉宮は都を出て

シテ 辛い思いをして近江の

地謡 三井寺へ逃げたのです。平

家がすぐさま數萬騎を遣わ

したと知ると音羽山を越え

山科の里へ出て、木幡の關

も避けて、人生は辛い旅の

ようだと宇治橋を渡つて大

和の方へ急いだのですが

シテ 寺と宇治との間にて

地謡 關路の駒の隙も無く

宮は六度まで御落馬にて煩はせ給ひけり
それは前の夜御寝ならざる故なりとて
平等院にして 暫く御座を構へつつ宇治橋
の中の間引き離し

下は川波 上に立つもともに白旗を靡かし
て寄する敵を待ち居たり

シテ かくて源平の兵

宇治川の南北の岸に打臨み

鬨の聲矢叫の音 波に類へて夥し

味方には筒井の淨妙一來法師

橋の行桁を隔てて戦ふ

橋は引いたり水は高し

さすが難所の大河なれば

左右無う渡すべきやうも無かつし所に

田原の又太郎忠綱と名宣つて

宇治川の先陣我なりと

名宣りも敢へず三百餘騎

地謡 銜を揃へ川水に 少しもためらはず

群れゐる群鳥の翼を並ぶる羽音もかくやと

白波に

ざつざつと打入れて浮きぬ沈みぬ渡しけり

シテ 忠綱兵を下知して曰く

水の逆巻く處をば 岩ありと知るべし

地謡 弱き馬をば下手に立てて

強きに水を防がせよ

流れん武者には弓箭を取らせ

互いに力を合わすべしと

唯一人の下知に由つて

さばかりの大河なれども一騎も流れずこな

たの岸に

喚いて上れば味方の勢は

我ながら踏みも溜めず

半町ばかり 覚え退つて

切先を揃へてここを最期と戦うたり

シテ 三井寺と宇治の間で

ワキ 高倉宮は六度も馬から落ち

これは前夜お寝みにならな
かった為と平等院に御座所
を設け、宇治橋の橋板を取
り外して敵が渡れないよう
にして源氏の白旗を靡かせ
敵を待ったのです。

シテ 源平の両軍は宇治川の南北

の岸に対峙して、鬨の聲、

矢叫の音、川波の音が一緒

になる中、味方の筒井の淨

妙一來法師が奮闘したので

す。橋板が外され、水高は

高く急な流れで容易に渡る

ことができそうにないところ

に、田原の又太郎忠綱が

「我が先陣を立てる」と名

乗るやいなや三百余騎が

地謡 馬の轡を揃えて川水を少し

も恐れず、群鳥が翼を並べ

た羽音のような音を立て、

白波にざつざつと飛び入

り、浮いたり沈んだりしな

がら渡ったのです。

シテ 忠綱が部下の軍勢に

地謡 水の逆巻く所は岩がある、

弱い馬は下流にやり、強い

馬を上流にやり、流されそ

うな武士には弓箭を持たせ

て引き寄せ、力を合わせて

渡れと指図すると、全員が

鬨の声を上げ北岸に來たの

で味方の軍勢は半町ほど後

ろに退き、これを最期と戦

ったのです。

さる程に入れ亂れ
我も我もと戦へば

シテ

頼政が頼みつる

地謡

兄弟の者も討たれければ

シテ

今は何をか期すべきと

地謡

唯一條に老武者の

シテ

これまでと思ひて

地謡

これまでと思ひて平等院の庭の面

これなる芝の上に

扇を打敷き鎧脱ぎ捨て座を組みて

刀を抜きながら

さすが名を得し其の身とて

シテ

埋木の 花咲く事も無かりしに

身のなる果は 哀れなりけり

地謡

跡弔ひ給へ御僧よ

かりそめながらこれとても

他生の種の縁に今 扇の芝の草の蔭に

歸るとて失せにけり立歸るとて失せにけり

かくして両軍入り乱れ、我

も我もと戦っている間に

シテ

頼政が頼りにしていた

地謡

我が子仲綱、兼綱兄弟も討

たれてしまったので

シテ

もう何を目当てに生きる甲

斐もないと

地謡

老武者の一徹に

シテ

あきらめてしまひ

地謡

平等院の庭の芝の上に扇を

敷き、鎧を脱ぎ捨てて坐り

刀を抜きながら、さすが歌

の名人と言われた者として

シテ

『埋木の花咲くこともなか

りしに 身のなるはては

あはれなりけり』と辞世

の歌を遺して自害したの

です。

地謡

お僧、どうぞ御回向をして

ください。かりそめながら

今お逢いするのも前世の宿

縁です、と言って頼政の幽

霊は扇の草の蔭に帰るよう

に消え失せてしまったので

した。

